

## 2022年新年の挨拶

新宿区医師会会長 平澤精一

皆様、新年あけましておめでとうございます。医師会長の平澤でございます。

会員の皆様におかれましては、コロナ禍が続く中ではありますが、恙なく健やかに新春をお迎えになられたことと存じます。

この原稿を書いている12月10日の時点では日本の新型コロナ感染者数は、東京で30人を下回る日が続いており、感染状況は極めて安定しているといえますが、この状況は日本だけにおける例外的な現象であり、世界の国々ではワクチン接種率の高い国でも感染者数の激増が認められています。日本で感染者数が激減している理由として、マスク効果、飲食店等の徹底した感染予防対策、人流や飛沫とは無関係な周期的感染爆発説、ワクチンの効果、ロックダウンを行っていないため集団免疫の獲得説など様々な仮説が立てられていますが、はっきりとしたエビデンスは示されていません。国民の行動変容やワクチン接種、専門家の介入など、複数の要因が重なることによって感染者数が総数として少なくとどめられているに過ぎない可能性があります。

南アフリカで発生が報告された感染力の非常に強いオミクロン株の出現という問題もありますが、現在のところ疫学的な情報が不足しており、重症化や死亡率に対する影響は未確認です。このような現状のなか、大方の専門家は第6波が来ると予想しており、来るとすればできるだけ小さな波に抑えることが肝要です。

そういった意味で、医師会には世間一般よりより厳しい、最高レベルの感染予防対策が求められると思います。それ故、本来ですと1月5日の新年祝賀会の会場で皆様の前でご挨拶すべきところでございますが、本年度の新年祝賀会も昨年に続き中止とさせていただき、紙面での挨拶に代えさせていただくことにいたしました。

ご来賓としてご来場いただく予定だった方々には、大変ご多忙のところ、新宿区医師会誌にごあいさつ文を賜り、誠にありがとうございました。新宿区医師会を代表して厚く御礼を申し上げます

さて、昨年を振りかえってみますと新型コロナウイルス感染症の猛威は2020年末から衰えを知らず、2021年年明け早々に東京、神奈川、千葉、埼玉の1都3県を対象に2回目の緊急事態宣言が発出され、多難な年明けとなりました。新宿シティマラソンは中止となり2月に予定されていた新宿・中野・杉並区合同産業医研修会も延期せざるを得なくなりました。飲食業、旅行業者のみならず、医療を取り巻く環境も悪化の一途をたどりました。

感染爆発の中で自宅療養者が急増し、急変し死亡するケースも見受けられ、東京都では「東京都新型コロナウイルス感染症自宅療養者フォローアップセンター」を設置し、自宅療養者支援システムの構築を進めました。

このような状況の中、コロナ収束への切り札として待望されていたワクチンの接種体制

の協議が1月21日から新宿区と開始され、実際に医師会員等の医療従事者に対する接種は4月から国立国際医療センター病院、JCHO 新宿メディカルセンターの協力のもとスタートできました。

その後、区民に対する接種も高齢者から順次始まり、7月にはワクチンの供給が一時停滞し、個別接種を請け負う先生方の受付に電話が殺到して業務に支障を生じるトラブルもありましたが、11月には8割弱の区民の2回接種が終了し、11月24日には新宿区長より、ワクチン接種に協力したことに対して基幹病院とともに当医師会に感謝状が贈呈されました。

また、感染予防対策と経済との両立方法も模索され、6月には抗原検査を行いスマホによる通知を行い、陰性者は飲食店入店可能とする当会副会長で東京都医師会黒瀬理事の主導による「東京コロナパス」実証実験が、新宿歌舞伎町で行われました。当時の西村経済再生担当大臣の視察もありましたので、これが先駆けとなってその後の国の提唱する「ワクチン・検査パッケージ」につながっていったものと思われます。

4回目の緊急事態宣言下の最中、東京オリンピック・パラリンピックが開催され、7月下旬から8月にかけて新型コロナ患者数が激増し、いわゆる第5波の中で8月中旬には過去最大の感染状況の悪化を認め、病床はひっ迫し、宿泊施設に収容できない入院調整者、自宅療養者が増え、これを支える在宅医療も切迫しました。抗体カクテル療法も始まりましたが、患者の移送手段も含め、当初はその恩恵は一部の患者に限られました。東京都では酸素治療ステーションが設置され新宿区医師会からも出動に協力しました。

この第5波の最も感染者が多い状況下で、自宅療養者対応に苦慮した経験から、今後の感染爆発に備え、在宅医療機関より強い要望のあった一時宿泊型療養施設の設置が区長の即断で実現する見通しとなり、予算も確保していただき、第6波に対する備えができました。新宿区のご英断に対し、紙面を借りて厚く御礼を申し上げます。

その後、原因が解明されないままコロナ感染者数は減少を続け、第5波が落ち着いた状況になった8月下旬には、延期となっていた新宿・中野・杉並区合同産業医研修会を東京都医師会館で行い、また9月にはコロナ禍で開催できなかった「新宿医学会」と「医学懇話会」を統合し「新宿医学懇話会」と改称し、ハイブリッド方式で開催することができました。

9月30日には緊急事態宣言が解除され、幸いなことに現時点でも感染者数は低く保たれています。

このように、結局のところ、去年はコロナに始まりコロナに終わる年になりました。

今後、今回のコロナ禍が収束したとしても、地球のグローバリゼーションによってパンデミック感染症の周期は短縮されていくと思われます。抜本的な対策がなされないまま次のパンデミックが来ると、再び痛い目に遭う可能性がありますので、喉元過ぎて熱さを忘れる前に、本質部分の検証をしておくことが次世代に対しての我々の義務であると思います。

BMJ誌2021年11月17日号には、メタ解析の結果、「手洗い（相対リスク：0.47、95%信頼区間：0.19～1.12、I<sup>2</sup>=12%）、マスク着用（0.47、0.29～0.75、I<sup>2</sup>=84%）、対人距離

保持（0.75、0.59～0.95、I2=87%）が COVID-19 発症率の減少と関連していた。」という記事が掲載されています。

また、理化学研究所の最新の報告では、日本人の約6割が保有するとされる白血球の型「HLA-A24」を持つ人は、従来の季節性コロナウイルスに対する免疫細胞「キラーT細胞」が、新型コロナウイルスの感染細胞も攻撃し排除するという実験結果が発表され、日本における新型コロナの感染者数や死亡数が海外に比べて少ない要因ではないかと推定されています。

このような一部限られたデータはあるものの、感染者数や死亡者数が、諸外国に比べて少なく抑えられていると、感覚的に対策が上手くいっていると感じられ、気がゆるみがちです。繰り返しになりますが、その理由が科学的に確実に解明されていない限り、パンデミック対策が完結したことにはならないと思います。

今後とも、マスク・手洗い・三密を避けるといった基本的な感染症予防対策を厳守するとともに、コロナ禍の中だからこそ飛躍的に進歩したデジタル化、オンライン技術等を駆使しながら、with コロナ・post コロナの時代の未来像をしっかりと描いていかなければなりません。

新型コロナウイルス感染症対策のご指導や検証に対するご協力をいただいた尾崎会長をはじめ東京都医師会の皆様、基幹病院の先生方、多くのご支援を賜った吉住区長をはじめ新宿区の方々に厚く御礼を申し上げます。

また、長引くコロナ禍のなか、PCR 検査スポットへの出勤、診療・検査医療機関として発熱外来の担当、ワクチン接種事業や東京都におけるコロナ対策事業への参加などご協力いただいた会員の先生方には深く感謝申し上げます。

第6波に備えて、診療・検査医療機関として発熱者の診察をしていただいている先生方、自宅療養者の激増した際に対応をお願いした在宅訪問診療を行っている先生方には引き続き、診療体制の維持をお願いいたします。また、新型コロナワクチン3回目のブースターショットにもご協力をお願いする次第です。

昨年の干支は辛丑（かのとうし）で、「かのと」は辛抱の辛と書くため低調で低迷な冬の時代を意味し、一方で統制を強化するという意味もあり、まさに新年早々緊急事態宣言が発出された昨年を象徴するかのようでした。

本年の干支は壬寅（みずのえとら）で、草木が伸び始める様を表していることから、成長を見込める年として期待が持てそうです。

1日も早く、全ての人々が安心して暮らせる日がくることと、皆様方のご健勝を祈念いたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

令和4年1月5日